

あつる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

不遇な子供時代

札幌の写真の歴史は明治五年（一八七二）五月武林写真館の開業に始まる。この写真館の創設者は武林盛一。札幌のみならず北海道写真界の先覚者である。

盛一は陸奥の国弘前城内で天保十三年（一八四二）一月十六日に生まれた。時の家老大道寺氏の庶流であったため、幼い頃母親に抱かれ、弘前城を出て鰯ヶ沢に下向した。その後、間もなく母が病没し孤児となる。鰯ヶ沢に廻船業者で武林万兵衛という人物がいた。万兵衛には子がなかったため、彼の養子となる。しかし、ここでも不幸に襲われる。強い浜風のため船が破壊され、養父万兵衛は財産をほとんど失ってしまったのだ。一家は家を出て数年、青森付近の港町で浮き草の日々を送っていたが、遂に北海道に行くことを決意し、海峡を渡って函館に移住した。だが家計はますます困窮していく。その時、盛一はわずか十四歳であったが、風に絵を描き数銭の収入を得て生計を助けた。時には養父の後に従って重荷を背負い、歩いて寿都まで出稼ぎに行ったという。

函館から札幌へ

十七歳の時に箱館奉行小出大和守調役村上愛助の邸に中間として雇われ、そこで剣道を修行した。その技量に見るべきものがあつたため、村上の推挙で同奉行所の足軽に取り立てられ、次

いで門衛になった。

明治維新の頃、盛一は船舶の検閲係として外国の軍艦に出入りしていたため、士官等との交流があつた。その時注目したのが写真術であつた。もともと技術工夫に巧みな資質があつた盛一である。刻苦奮闘、写真の修得に努力し、苦心惨憺、不完全ながら一個の写真機を作りあげ、何とか写真が撮れるまでになった。この間、写真を理解できない養父から「切支丹・伴天連の邪法に苦心するとは許し難き国賊なり」と敵

北海道
秘話
北歴
15

札幌の 写真 開拓者



札幌はその創世記が写真に残されているという世界でもあまり例を見ない都市である。開拓使本庁舎や札幌市街風景、豊平橋など、開拓時の写真を残した一人に田本研造の弟子、武林盛一がいた。しい責めを受け、苦勞して作った暗箱を壊されたことが何度もあつたという。

明治二年（一八六九）の箱館戦争平定後、盛一は開拓使等外吏となり、囚獄課に勤務したが、やがて吏を辞して函館天神町に居を構え、ここで写真術を家業として始めた。明治四年のことである。しかし、一〇七四戸を焼き尽くしたその年の大火で類焼し、二〇〇円の負債を負つ羽目に陥り、翌年五月、札幌に移転した。

当時の札幌は戸数五五〇戸、人口一五〇〇人余りの小さな町に過ぎなかつた。

だが、北海道の首府としてここに一大都市を建設し、全道の開拓警備を行おうとの壮大な計画があつた。その計画がスタートし、官舎や一般住宅の建築が盛んとなり、募集に応じて東京から来た諸々の職工が多数やって来ていた。また内地からの移住民も続々集まり、活気が出てきた時期であつた。

お抱え写真師に

最初盛一は南一条東二丁目の高橋旅館に宿り営業を開始したが、満足できなかった。幸い南一条西三丁目に一室を借り受けることができ、ここで営業を試みたところ、開拓真つ盛りの札幌である、開業早々より好評を博し、盛況となって予想以上の収益を上げ、負債も返却することができた。家運が隆盛となつてきたので、十月には再び函館に戻ろうと考えていたところ、知人が月俸三〇円（約三〇万円）プラス南

三条西五丁目の官舎付きという開拓使お抱え写真師の職を世話してくれた。開拓使は、札幌繁栄のための足止め策として、技芸のある者を積極的に雇い入れていたのである。

翌明治六年には、大通西二丁目の宅地を付与され、ここに家屋を新築した。その後、お抱え写真師の身分を解かれ開拓使一五等出仕を拝命、用度係勤務となり、官吏の一員となったが、これは盛一の本意ではなかった。

札幌で業務拡張

明治八年、今度こそ函館に帰ろうと決意したが、当時札幌には他に写真業の同業者がいなかったため、予想外の繁盛振りとなり、函館に帰る志を翻すこととなる。

そして明治九年、南三条西二丁目写真館を新築し業務を拡張した。

札幌の人口増は激しく、この頃には個数二二〇〇戸、人口二七〇〇人余りとなったが、写真館は武林写真館だけ。売上はもちろん技術もアップし、大いに名声を博したという。

盛一には子がなく、弟子の三島常磐の長男磐雄を養嗣子として入籍した。しかし磐雄は写真業を継がず、文芸家となつてフランスに遊学し、無想庵の号をもって文壇で活躍した。

札幌創建当時の貴重な写真を数多く遺した武林盛一は、その後明治十七年（一八八四）、東京に写真スタジオを開設。明治四十一年（一九〇八）、六十七歳で亡くなった。

法邑美智子

さん



茶廊法邑

私の実家は篠路の水田農家で、カエルの鳴き声と共に育ちました。結婚して子供が二人。主人は四代目ですが、目が不自由なためほとんど農家の仕事ができないので、私が三三歳の時に喫茶店と洋食が主の飲食店を始め、十年間位やっていました。ウエシマの喫茶教室からスタートし、中華料理店・洋食店などいろんな所に行き、二年位修行してから始めたんです。この辺には飲食店が無かったのでお客さんに恵まれました。全く芸術とは関係のない生活でしたが、関西の大学に進学した息子達に毎日絵手紙を書くようになり、

それがきっかけで日本画の教室に通うようになったんです。

タマネギを作っていたんですが中途半端なんです。個人でコッコツやるには広すぎるし、機械を入れるには狭すぎる。五八歳の時、子育ても終わつたし、タマネギ畑に何か建てようかなと思いました。建てるなら自分が今まで経験してきたカフェと趣味でやっている日本画のギャラリーの二棟を建て、真ん中を繋いだ建物にして、生き甲斐と経営が成り立ってほしいかなど。そんな感じで茶廊法邑を建てたんです。前のお店はどちらかと言うとヨーロッパ的だったんですが、ここはギャラリーとしていろんな物を見るので、天井が

Dilettante 悠々人語録

2004年9月、4代続いたタマネギ畑の跡地に誕生したモダン和のギャラリー&カフェ「茶廊法邑」。今回の悠々人語録は「茶廊法邑」7年間の熱き思いを綴った『眼』の著者、法邑美智子さんの悠々人語録です。

ある程度高くて白と黒の禅の世界のような落ち着いたお店にしたいなと思ってんです。私は設計のほうは何にも分からないのでほとんどお任せでしたが、飲食のほうと完全に分けることだけは、どうしても守りたかった。

料理は野菜をメインにした家庭料理を箱膳として出しています。ギャラリーとカフェ自体が和のテイストなので、食事も箱膳にしようと思いついて決めた。

お喋りと人が好き

全然宣伝もしなかったし、広告も一切しない。大体札幌市内のギャラリーにそんなに足を運んだこともないのに

茶廊法邑を始めたので、多分親戚や近所の人は一年位しか持たないだろうと思っていたんじゃないですかね。

一回目が私の個展で、二回目が浅野天鐘先生の個展。その時に「エッ、札幌にこんなができたの」という具合に次々と皆さんに知られていったので、ギャラリーを埋めるのにそんなに苦労したことはなかったですね。今までギャラリーが空いたことって一度も無いんです。お喋りと人間が好きじゃないと、こつこつとギャラリーとカフェの経営はできないと思います。人から人へと繋がって「こつこつ作家さんいるけれど、どう？」とか「今度こつこつのは、どう？」というのがあるって、その作家さんの作品を見て、茶廊に合いそうだなと思つたらお願いをしているんです。

『眼』

もう一年もつ一年と言っているが七年間でした。その集大成として、作家さんが茶廊法邑でやった想い出になるようにとの思いで『眼』という本を出版しました。ギャラリーを使ってくれる作家さんがいなければこれほどの本はできなかったと思います。

あとがきにも書いていますが、今の世の中、ギャラリーとカフェの二つを同時に続けていくのは大変で、多くの人に助けてもらわなければなりません。ギャラリーのほうは法邑芸術文化振興会長の水崎先生にお世話になり、カフェのほうは働いてくれるスタッフがいる。そつこつと続けないと七年も続けて来

られません。もちろん私の元気な間は、この茶廊法邑のカフェとギャラリーを続けようと思っています。

今後の夢

見て来た人も参加できるようなギャラリーにしていきたい、というのが今後の私の夢です。私も、見て来た人も参加した作家さん達も、みんな楽しいというギャラリーにしていきたい。

それともひとつ。絵本の著者名である狸小路きみこの活動をこれから始めたいと思っています。人間しか持っていない会話・言葉を見直して、精神的にもつながっている人達、鬱になつたりしている人達などを元気付ける、そういう会を立ち上げたいと思っています。実はこゝ、身の上相談の場所みたいになつていっているんですよ。別に私、こつこつとあおしろとは言いません。ただひたすら聞いて、最後に一言二言アドバイスしているだけなんです。それだけでもすごく安らぐ人がいるのなら、そつこつとお手伝いをしたいなあって。私がまだ元気で生かされるんだから、自分の元気を皆と分かち合いたい、ただそれだけです。狸小路きみことしてのボランティアの生き方を見つけていきたいな。

法邑 美智子

ほうむら みちこ

一九八〇年「コーヒーハウスチェリオ」十年間経営。二〇〇二年ギャラリー&カフェ「茶廊法邑」開業。著作本「具体的抽象」絵本「敵男おじさんのひとりごと」発行。二〇一〇年「オサクばあちゃんのひとりごと」発行、第十四回日本自費出版文化賞入選。

あうる古今東西

文化譚

全国世帯の30%が銃を所持する国

アメリカ銃事情



今年の一月、またしてもアメリカのアリゾナ州で銃の乱射事件が起こった。さらに七月には北欧で大量銃撃事件が発生したことは記憶に新しい。アメリカの事件が世界中に影響を与えていることは、間違いないだろう。他国の文化について軽々しく批判するのは、慎重になるべきではあるが、あまりにもわが国との隔たりのある銃文化について考えてみたい。

銃は人類の有史以来、もっとも老若男女の技術を問わない武器といえる。それでいて殺傷力はもっとも強力なのだ。もちろん遠くから正確に命中させるには、それ相当の技術は必要だが、至近距離なら力も技も、相手の体に触れる必要さえない。

アメリカを建国した人々は、国家でもなく、軍閥でもなく、一族の集団でもない。世界中からそれぞれ渡ってきた人々が、各自個々に土地を占有し点となり、面に広がっていった。そのスピードは速く、政府も法もあとから追いかけてゆくという状態になった。入植者たちに保護して

くれるお上(かみ)はいないに等しい。自分の生命財産は自分で守るしかない。武器はすでに銃の時代だったから、だれもが銃で武装した。

簡単に言つと、これがアメリカ合衆国の自衛の伝統である。極端な例がある。ジョージア州アトランタ近郊のケネソー市は八十年代、条例で各世帯に銃の所持を義務付けた。確認まではしないが違反すると罰金二〇〇ドルという。結果としてケネソー市の犯罪発生率は、半分に減った。人口も三万人増えたのだ。理由はすべての世帯に銃があることで、犯罪者が犯行を避けるようになったということらしい。

最近の銃所持のニュースでは、極右のテキサスの公立高校では、教師の学校への銃携行が認められた。もちろん教室へも。教育委員会が認め事前訓練と、学校の理事会の許可が必要なのだが、携行していることが周囲に分かるようにすることが条件だということから驚きである。要するに抑止力ということだ。

もちろん反対の州もある。二〇一〇年のシカゴ議会は、銃の所持者が携行して自宅から外へ出ることを禁止し、銃の登録に十五ドル三年ごとの免許更新に一〇〇ドルを課した。三十二人の死者を出した二〇〇七年のバージニア工科大学乱射事件の後、バージニア州議会には「銃器展示即売会」での売買の際の身元確認法案が提出されたが、否決された。

アメリカ合衆国では『全米ライフル協会』という組織が絶大な力を持っている。会長は俳優のチャールトン・ヘストン氏である。銃器メーカーと共に政界にも影響力は強い。もし禁止すれば密売などの取締りや犯罪組織に流れる力ネは計り知れないという。

いずれにしても、銃の所持の禁止ということにはならないのがアメリカなのである。あるアメリカ人が言った。「銃を持った強盗と、パトロール警官がセットで歩いているなんてことは、ありえないんだ。」

BOOK INFORMATION

一冊 紹介 受書

『電子書籍奮戦記』

電子書籍版

萩野正昭・著

新潮社

定価一、〇九二円

(税込)

二〇一一年

七月一日

発行



二〇一〇年は「電子書籍元年」と言われた。米アマゾンの動向を背景に、アップルのiPadや国産の読書端末の登場がきっかけだろう。しかし、二十年前から「この道一筋で生きてきた」ボイジャー社代表である著者は、この「元年」報道を複雑な思いで聞いたに違いない。本書は大まかに三つの内容に分かれる。①電子書籍の現状とボイジャーの関わり。②著者自身とボイジャー

の歩みを通して語る黎明期のドキュメント。③少数寡占に反対する取り組みと、電子書籍の未来について。著者は①の中で「電子書籍は情報そのもの、つまり物理的な形状を保持しない純粋コンテンツ」であり、紙の本に対立するものではなく、出力形態の違いに過ぎないと捉える。②では多くの人々との出会いが語られる。東映を皮切りにレーザードディスク社へ移り、アメリカのボイジャー社と関わりの中で「電子書籍」のヒ

(Y)

北海道 同人誌

文学岩見沢



私たちの「文学岩見沢」は、昭和四四年の創刊以来、会員制で会費収入をもって発行を続け、現在八四号の編集中です。会費は毎月二〇〇〇円で作品掲載料、送料も収めていただいています。現会員は一〇〇人で創刊当時の二倍になっています。ページは三〇〇〜三七〇程度で二〇〇頁を超えたこともたびたびです。発行部数は現在四五〇部です。頒布価格は一〇〇〇円で市内の書店・喫茶店など八箇所販売しております。運営費は八〇〇〜一〇〇万円程になりますが、岩見沢市から毎年一〇万円の補助を受けています。

年二回発行している「文学岩見沢」は市民芸誌です。同人誌とは性格を異にしますが、北海道同人雑誌懇話会の仲間に入れていただいていることで、書かせていただきました。お許し下さい。

同人が地域を超えて加入できる同人誌

と異なり、本誌の会員は市民です。かつて市民だった方や職場が岩見沢にある方、市内の文芸サークルに加入している方々も加入しています。短詩型作品を含む総合文芸誌ですが、懇話会へは初回から参加しています。それは毎月、小説が六〜八編あり、その面々共通すると思つたからです。お陰で、平成二三年の同人雑誌フェア展や同人雑誌作品集に参加でき、平成二三年の第二集作品集や交流会にも加わって、大きな刺激を頂いています。

この四〇数年、財源的に継続発行が困難な時期もありましたが、文学バザールを開いたり臨時会費を納めていただいたり、近年は作品掲載料等も加えていただき苦境を乗り越えてきました。けれど苦難の道は続いています。

そんな中で文学の火を灯し続けるため、「書き手」や「読み手」を増やす『広がり』を求め、「作品の質」の『高まり』を願って毎年、「文学岩見沢奨励賞」(三一回目)を贈呈し、「文学ゼミナール」(二八回目)・「文学バスツアー」(二七回目)・「文学交流会」(三〇回目)を開催しています。これからも書き手の拡大と作品の質的向上にひたすら努めてまいりますので、折を見て本誌にご助言をいただけると幸いです。(文学岩見沢の会代表 堀 利幸)

緒里尽



「緒里尽」は年一回の出版で現在一七号。その間、色いろの事情から止めて行く人が多く、なんとか書き手を増やさなければと苦慮したが叶わず、ついに四名になってしまった。

朝日カルチャーセンターで小説作法(小松茂講師)を学んでいる内の9名が、慾求に駆られるまま自分達の同人誌を編むに至ったのは、一九九四年の事。会則も決まり、さて肝心の誌名は、とひたひたを集めた。あれがいい、それともこれか、と意見は活発に出るもの決定はせず、宿題とした。

二、三日して同人の一人から連絡が入った。大通りから駅に向かって歩いていたら北一条の街角に古びた道標があつて、よく見ると外国語で「オリジン」と記していて、札幌市のここが起点との説明もあると。早速、辞典で確かめる。オリジンの意味は、起源、出所、血統、始め、とあった。これだ、とみんなの思いがまとまり、更に横文字よりも漢字のほうが、と好きな文字を当て嵌め「緒里尽」とした。この、解つたような解らぬような名前はよくどんな意味かと問われるが、それにはあつさり説明させてもらっている。振り返ってみて、なやましくも心の昂揚を覚えた場面ではあった。

きたら緒里尽は休刊せざるをえない。しかし、と編集人は思ふ。

ものは考えよとて数の少なさにも利点はあった。相談事は素早く決まり、原稿難、資金難も無し。気がつけば残るべくして残った4人は迷わない。にっちもさっちも行かなくなったその時まで、腹を括って小説を書く。それだけの事なのだ、と。勉強の一つの方法としては月に一度集まって、その年の短編の集大成「文学2010」(日本文藝家協会編)を読み、個々の作品について感じた事をべらべら時には今をときめく新進作家の小説をコテンパンにけなしたりもし、プロの作家がとらえる文学の現在が透けて見えるよう興味深い。

昨年、中西出版の力添えに世話人諸氏の労が実り「北海道同人雑誌懇話会」が発足した。

緒里尽は、なにもいじけて少人数でやっているわけではなく、同根の人達に会うのも文学の話を聴くのも好きで、とにかく横の連携が出来た状態をよろこびながら引き締めている。(佐藤玲子)



■編集部から 10月にアップル社のApp Store上に、電子書籍専門ストア「ブック・ネット北海道」をオープンした。「北海道」というくくりで、関連する作品や他の出版社の作品も含め、北海道からの情報発信の足場とする可能性を考えている。個人でも発表の場として利用できる。日本で電子書籍の普及がどういう道筋を辿るか予想はつかないが、コンテンツが揃い、利用者目録のフレンドリーな利用環境が整備されれば、ひとつの選択肢になるのではないかな……。出版社としては、読者の多様な要求に応えられるように豊富な「品揃え」を急ぎたい。(H)

●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL: <http://nakanishi-shuppan.co.jp/m>
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp

●発行責任者／林下英二
●発行日／2011年12月26日 ●デザイン／上野修一



ホームページへ
アクセス!